

東大駒場友の会



会報第32号

秋の行事のご報告

村松真理子・新井宗仁

多くの会員のみなさまのご参加に感謝いたします。

秋の文化イベント「東大教員と巡る駒場博物館とキャンパス」

このイベントは、会員同士および会員と教員との交流を深めることを目的として新たに企画したものです。二〇一八年九月二二日に開催し、会員二一名と教養学部教員九名が参加しました。今回は、本学教授の道上達男先生をお招きして、最初に先生のご専門である発生生物学についてのわかりやすいレクチャーをしていただきました。発生生物学とは、生物の体が卵からどのようにしてつくられるのかを解き明かそ



うとする学問です。駒場博物館ではちょうど「卵からはじまる形づくりー発生生物学への誘い」と題した特別展が開催されており、小さな生物たちの美しい写真や、最先端の知見を平易にまとめた展示が多数ありました。レクチャーの後は、道上先生の解説付きで博物館を観てまわり、とても贅沢なツアーとなりました。

昼食会では、駒場キャンパス内にあるレストラン「ルヴェンヴェール」のランチを、会員と教員が楽しく語り合いながらいただきました。昼食後は、折茂克哉助教の案内で、緑に囲まれた駒場キャンパス内のツアー。朝方の小雨も午後には落ち着いて、過ごしやすい天気の中を会員と教員と一緒に散策し、楽しいひと時を過ごしました。

「味覚のアトリエ@駒場クラブ・アトラス×味覚の一週間」東大生へ向けての食育

フランスの料理界と教育界が共同で行っている「味覚の一週間」に協力する形で、じまったこの催し。二〇一八年十月二二日、日本で活躍するシェフたちの集う会「クラブ・アトラス」と共催しました。今回はフランス料理の歴史と「古典」的レパートリーに関するレクチャーを聞き、「正式」で「本物」のフレンチをその場で知的に体験するという企画。ヨーロッパ中世史が専門で『お菓子でたどるフランス史』の著者、池上俊一教授にご講演いただき、宮廷料理から国際料理へと発展した食の社会文化史に思いをめぐらせながら、事前に予約した学生たちと友の会会員のみなさんが、伊藤文



彰氏（ルヴェンヴェール）、川端清生氏（テロワールカワタ）、清水郁夫氏（Chez Shizun）の三人の名シェフが腕を振るった逸品に舌鼓をうちました。

「秋の講演会」

二〇一八年十一月二五日、駒場祭の最終日で活気あふれるキャンパスの片隅にて、毎年恒例の「秋の講演会」を開催しました。第一部では「東大生の選択ー夢の道筋」と題して、本学学生相談所の細野正人特任助教が東大生の学生生活について講演し、東大生の多くが進路についての悩みを抱えていることなどが紹介されました。また、現役学生二名も登壇し、自分の大きな夢の実現に向けて精一杯学んでいる様子を熱く語りました。

第二部では「生物学は大きく社会を変えているー生命科学の現状と課題」と題して、本学名誉教授の浅島誠・友の会会長が登壇しました。浅島会長は道上先生の恩師でもあり、卵のどの部分が筋肉や心臓などに分かれるのかを決めるタンパク質（アクチビン）を発見し、ノーベル賞候補となる偉業を成し遂げました。アクチビンはいP S細胞を用いた再生医療においても必要な物質です。浅島会長はこの業績により、二



〇〇一年に紫綬褒章と日本学士院賞・恩賜賞、二〇〇八年に文化功労者、二〇一七年に瑞宝重光章を受けています。講演の前半では、不可能といわ

れた発見をどのようにして成し遂げたのかを、自身の生い立ちや学生時代にさかのぼって語り、参加学生は大きな刺激を受けたようでした。後半では、生命科学の発展によって実現しうる未来の展望を語りました。

講演のあとは講師も交えての茶話会。約百名の参加会員の皆様は、駒場での学生生活や教育などについて、教員らに活発に質問されており、大変盛況でした。

共催・協賛の秋の音楽会

十月三日 第一三九回オルガン演奏会

パヴェル・コホート（オルガン）。曲目はD. ブクステフーデ、J. パッヘルベル、J. S. バッハなど。

十月十七日 第一四〇回オルガン演奏会

ヴィツレ・ウルボネン（オルガン）。曲目はN. ブルーンズ、J. コッコネン、J. S. バッハなど。

十二月五日 第二三回室内楽演奏会

家喜美子（チェンバロ）。曲目はJ. P. ラモー、J. S. バッハなど。

駒場図書館を歩く

蓮見ちひろ

駒場図書館は、キャンパスの東側、食堂や生協購買が並ぶ中庭に面したエリアに建つ、地上四階地下二階の建物です。連日、約二千人の利用者が訪れ、学習や研究に取り組んでいます。今回は紙上ではありますが当館の様子をご案内します。それでは早速館内を歩いてみましょう。

今年一月に新しくなったばかりの入館ゲートを通り、突き当たり左側にあるのはメディアパークです。学内者専用のECC S端末を利用してデータベースを検索したりレポートを作成したりすることができ、試験・レポート提出期限前には特に混み合い、満席となることも珍しくありません。メディアパークを通り過ぎ展示コーナー（授業の成果発表やサークルの活動紹介など様々な展示をしています）の向かいにあるのはGENKI BOOKSの書架です。ジェンダー論を専門とする瀬地山角教授と学生たちが選書した和書・洋書が並びます。ちなみにGENKIは、Gender Equality: Nonsense Knowledge and Information



の頭文字を取ったものです。「男女学生が共に自立し理解しあって元気に生きていくことに役立つ本」という視点で選書され、学習・研究書に限らずポップな本も敢えて購入しています。これらの図書は東大駒場友の会による「学生のための寄付」を活用して購入しています。二〇一八年度もジェンダー関連の新しい図書約八〇冊が追加され、早速利用されています。

螺旋階段を上り二階へ出ると吹き抜けから自然光が降り注ぐ明るい空間が広がります（写真参照）。岩波文庫や講談社学術文庫などが置かれた文庫・新書コーナーは利用が多く、ところどころ図書が借り出された後に隙間ができています。小型の図書は携帯しやすいため人気なのでしょう。スマホ全盛の現代ですが「駒場図書館」のラベルが付いた図書を読む学生の姿を井の頭線よく見かけます。グループ学習室では発表の準備をしているらしい学生たちがプロジェクターでスライドを投影しながら議論をしています。辞書・辞典類が置かれた参考図書コーナーそばのゆったりとした丸テーブルでは大事典を広げながら持参したパソコンに文章を打ち込む学生の姿がありました。

三、四階は南側に閲覧席、北側に書架が配置されています。（資料の日焼けを防ぐため一般的に図書館の書架は南側を避けて設置されます）。南側と北側をつなぐ渡り廊下を歩くときは、駒場図書館名物斜め窓を見ると錯覚で足元がふらつくのでご注意ください。この三、四階の書架に並ぶ図書は主に前期課程の学生向けの学習書や各分野の入

門・概説書ですが、その一部を「学生のための寄付」を利用して購入させていただいています。二〇一八年度は三〇〇冊以上が購入され、学生たちがレポート作成などに大いに活用しています。後期課程に進学した本郷の学生から「駒場図書館はよかった」というお声をいただくことがあります。本郷の専攻図書館・室は専攻別の高度な専門書を多数所蔵するため研究には向いていますが、複数の分野の図書を横断的に渉猟することのできる当館の蔵書は視野を広げアイデアを生み出す場として魅力的に映るのでしょうか。本学の学生であれば他キャンパスの図書館・室の蔵書を取り寄せて利用することもできるのですが、前期課程時代に漠然としたテーマを抱えながら書架を歩き背表紙を眺めて役に立ちそうな図書を見つけた経験がそう言わせるのかもしれない。北側書架窓際のカフェのような閲覧

席からは晴れた日は青空と新宿西口方面のパノラマビューが気持ち良く、夕方には向かいのコミュニケーションプラザ北館で競技ダンスや空手の練習をする学生の姿が見られます。

一方、地下へ降りると雰囲気ガラリと変わります。集密書架奥の座席では院生らしき学生が論文執筆に没頭しています。古い本の匂いが立ち籠める静謐な空間は思考を深めるのに向いています。主に雑誌のバックナンバーや後期課程学生・院生用の研究書を所蔵する地下一・二階は閲覧性を維持しつつ可能な限り多くの所蔵スペースを確保する電動集密書架を導入しています。それでも開館から十七年が経ち、どの書架も図書で埋まりつつあります。当初二期棟を隣に建てる計画で建築されたため当館公式キャラクター「こまとちゃん」も新棟の建設を首を長くして待っています。

（駒場図書館 図書係）

難民、移民、外国人労働者

——ドイツの場合——

高橋宗五

昨年十二月八日に入国管理法（正式には「出入国管理及び難民認定法」）の施行採決が行なわれた。「特殊技能一号」の資格には単純労働も含まれるなど言葉が現実や事実と相違する余りにもお粗末な法改正としか言いようがない。自分の語っている言葉を理解していない人物が首相になる国ならではの現象であろうか。外国人労働者受け入れの問題を現在のドイツで問題になって

2017-2018

東大駒場友の会寄贈図書 貸出ベスト3

『測度・確率・ルベーグ積分』
原啓介著

『理系総合のための生命科学』
東京大学生命科学教科書編集委員会編

『Pythonで動かして学ぶ！
あたらしい機械学習の教科書』
伊藤真著

ホームページ
<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/komaba>

@UTokyoKomabaLib

いる移民や難民の問題とともに考えたい。
今回の入管法の変更で外国人労働者が大量に日本に入ってくる可能性が出てきた。しかし政府が今後五年間で最大三四万人と見込んでいる「特殊技能一号」の資格でやってくる外国人労働者は「移民」でもなければ「難民」でもない。基本的にはこれは単なる「出稼ぎ労働者」である。

最近ヨーロッパで問題になっているのは難民である。何が問題なのか。例えばドイツの場合、両親と子供二人の難民家族であれば月額約二千三百ユーロ(二月中旬現在の為替レートで換算して約二八・九万円)の手当が支給される。百万人以上の難民を受け入れたドイツ国民の負担は二〇一六年で二兆数千億円、それが二〇二〇年にはさらに一兆円以上の追加支出が必要になると見込まれている。これまで税金を一銭も払ったことのない外国人に何故これほどまでにしなければならぬのか。日本ほどではないにせよドイツでも高齢化が進行し、年金の水準が大幅に引き下げられた。難民に対して支出されるお金を社会保障に回しても、それと考える国民の不満は強い。

こうした不満は特に失業者や年金生活者に強い。難民の受け入れ制限を政策に掲げる政党「ドイツのための選択」等の右派政党はすべて旧東ドイツで生まれている。旧東ドイツのほうは失業者が多く、年金の受給水準も低いからである。つまり国内格差が存在し、それが問題の背景のひとつになっている。(EUで難民の割り当てに国として反対しているのはポーランドやハンガリー等の旧社会主義圏に属していた相対

的に貧しい国々であり、フランスの経済的に疲弊した地方では住民の七割前後が国民戦線を支持している。)移民排斥を唱える右翼政党への支持は現在では旧西ドイツ諸州にも広がっているが、労働力不足に悩む経済界からは不満の声は聞こえてこない。むしろ難民受け入れに賛成である。難民受け入れに伴う費用の多くは国乃至国民が負担してくれるのであるから不満であろう筈がない。

しかし難民への嫌悪感乃至は排斥感情はそれ以前から存在していたトルコ人移民の問題と結びついている。ドイツは奇蹟の経済復興と言われた好況の五〇年代から積極的に外国人労働者を受け入れてきた。当初はイタリアやギリシアから、続いてトルコから多くの出稼ぎ労働者を受け入れた。イタリア人やギリシア人の多くの出稼ぎ労働者は故国へ戻った。しかし多くのトルコ人は祖国へ戻らず生活水準の高いドイツに留まった。ドイツは国籍に関しては出生地主義を採り、外国国籍の両親の子供であつてもドイツで生まれれば二〇歳になるとドイツ国籍が取得できる。その結果多くのトルコ系ドイツ人が存在することになった。

こうしたトルコ人やトルコ系ドイツ人がドイツ社会に統合されれば問題はなかったであろうが、彼らはイスラム教徒であり、言語も風俗習慣も大きく異なりドイツ社会に溶け込めない人々もでてきた。その結果ドイツ人とトルコ系住民との間に様々な軋轢が生じた。日本ではそのようなことが起きないように外国人労働者、特に特殊技能一号の資格で入国する労働者の滞在期限を

五年に限定した。しかし滞在期間を五年に限定すると果たしてどれだけの外国人労働者が日本にきてくれるのであろうか。現在人才・労働力獲得競争はグローバルな規模で起きている。わずか五年間日本で働きお金を稼ぐことが、難しい日本語を学び様々な技能を身につける十分な動機になるのであろうか。魅力的な条件を提供できなければ外国人労働者は集まらない。また滞在期間を五年間に限定することは外国人労働者を使い捨ての労働力としてしか見ていないことを意味する。これは人権無視を助長する。低賃金と劣悪な労働条件の下で働かされた多数の技能実習生がその良い例である。そのような外国人労働者への人権無視や違法行為を防ぐには法や社会制度が余りにも未整備であり、国民にも十分な準備が出来ていない。政治家や官僚が、そして国民が問題の所在と事の深刻さを十分に理解しているとは思われない。これが杞憂であることを願う。

(本学名誉教授 ドイツ文学・演劇)

ダブルダッチが導く世界

田野崎はるか

大学からD-i-a-c-tというサークルでダブルダッチを始め、競技歴は八年になりました。学部生の頃に、世界大会で優勝したことから二〇一四年度の総長賞を受賞しました。現在は大学院総合文化研究科博士課程に在学し、リズム同期の知覚運動制御に関する研究を行う傍ら、日本代表として世界各国の大会に出場し、審査員や講師、ゲス

トパフォーマンスとしても活動しています。

ダブルダッチとの出会いは駒場祭でした。私が高校生の頃、駒場祭を見に行った母から、二本の大縄跳びの中でアクロバットやダンスをしている集団がいたよと報告を受け、すぐに動画を検索しました。もともとやっていた器械体操とストリートダンスを活かしつつ新しいスポーツを始めたいと思っていた私にとって、運命的な出会いでした。入学後、練習を頑張った甲斐あって、大学三年生のとき、NYはアポロシアターで開催された世界大会で三位となりました。その後は波に乗り、いくつもの大会で好成績を残し、現在では世界大会の常連となっています。

ダブルダッチの魅力のひとつは、究極のチームスポーツである点です。ダブルダッチを行うには、縄を回す人二人と跳ぶ人一人の少なくとも三人が必要となります。曲に合わせて二・三分の演技をする際は、しばしば五、六人のチーム編成となります。縄を工夫して回すのが上手な人、アクロバットが得意な人、ダンスが上手で表現力豊かな人、動きが独特で個性が光る人、構成を考えて人を配置させるのが得意な人など、各々の得意分野を最大限活用してチームを作ります。日本では大学生から始める人が多く、メンバーそれぞれのバックグラウンドが異なるため、出来ることや感性が多様です。そうした中、一人ひとりの存在感を残したまま統一した世界観を示すため、まずは人となりを把握し、チームとして見せたい事や個人としてやりたい事、さらには作品に込める思想を共有します。こ

うしてコンセプトを決め、それに沿った動き作り、曲作り、衣装決めへと移行します。このとき、構成を考えて動きの取捨選択をするリーダー、全体がコンセプトから外れないように監視する係、新奇性のある技や見せ方を考案する係、ミスしやすい割には凄く見えない技を見極めて代替案を出す係、見栄えや完成度をあげる係など、役割分担が重要となります。本番中は、一人ひとりの息遣いを気にして、予想外の事態が起きてもアイコンタクトを取りながら冷静に対処します。本番で全ての練習の成果が出せ、他人から高評価を得ることが出来た時にチームで喜び合う瞬間は格別です。

私が以上のようにパフォーマンス作りを俯瞰できるようになったのはサークルを引退する直前でしたが、自分が納得する形で役割分担をできるようになったのは最近のことです。引退後もしばらくは、プレイヤーとしての役割でもデモ作りにおける役割においても、欲張りな気持ちを持っていました。もともとダンスと体操をやっていたので必ずこの二つのスキルを活かしたい、縄回しも任されたい、見栄えや完成度をあげるのにもかわりたいたい等々。サークルを引退したあと、大学や世代の異なる人々といくつかのチームを組み、実力をあげたという自負があったのでしよう。現役の時よりも成長していることを仲間たちに伝えようと必死になっていました。

練習が始まってみると、結局理想通りに動けない自分への苛立ち、チームメイトが私を認めてくれないのではないかという不安と戦う日々が続きました。もやもや

が残るまま大会に出ることになりました。ところが、気持ちとは裏腹に世界のベスト四になることができ、全ては結果が解消してくれました(日本予選の映像は、<https://www.youtube.com/watch?v=r1bSe7N4SFk>をご覧ください)。私がチームメイトの実力を信じ切れず、適材適所の枠を無理やり超えようとしていたことに気が付き、心から仲間を信じる大切さを学ぶことが出来ました。その後、二年ぶりにチームを再結成して世界大会に出場した時は、負けはしたものの練習から最後まで気持ちよくやり切ることができました。ダブルダッチだけでなく、人として成長させてくれたのはこの仲間たちです。最高のチームメイトと世界大会で熱狂できるダブルダッチは私にとって最強のスポーツです。

最近では体育の授業にくみこまれたり、プロチームのメディア出演の機会が増えています。ダブルダッチがもっと普及することを願っています。

(大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系身体運動科学研究室 博士課程)

教養学部創立七〇周年記念出版事業について

石田 淳

新制東京大学に全国の国立大学の中で唯一の教養学部が創設された一九四九年から七〇年。その歴史の刻まれた駒場キャンパスでは、今年、第一回入学式(於安田講堂)が挙行された七月七日(日)に九〇〇番教

室(旧制一高時代の講堂)にて記念式典を開催します。また、その記念出版物『東京大学駒場スタイル——未来を拓く研究と教育の結合(仮題)』(東京大学出版会)を刊行することになりました。この記念出版事業には、友の会からもご支援を頂くことになっております。教養学部を代表して、そのご支援に心から御礼申し上げますとともに、ここに本書の企画についてご案内申し上げます。

企画は、武田将明・長谷川宗良・津田浩司の新旧研究科長補佐が牽引し、学部内の各部門の若手・中堅教員が創意を凝らしたものです。基礎科学科出身であるとともに、かつて駒場で教壇に立ち、二〇一六年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典博士と新旧学部長との「七〇周年記念鼎談」、アカデミー・フランセーズから二〇一六年にフランス語圏大賞を、日本学士院から二〇一八年に恩賜賞・日本学士院賞を受賞された松村剛教授ほか現職の教員が語る研究の最前線、教養学科出身の川口順子・元外務大臣ほか多彩な卒業生からの寄稿、駒場キャンパスの歴史、知的資源、施設、環境についてのエッセイなど、ご一読いただければ、駒場キャンパスのすべてが違って見えてくることと思います。ご期待ください。(教養学部長)

東大駒場友の会第三回活動報告会のお知らせ

二〇一九年六月八日(土) 午後四時四十五分より
会場：駒場コミュニケーションプラザ
詳細は、追ってご案内いたします。

東大駒場友の会会報【第32号】2019(平成31)年3月15日発行
東大駒場友の会 会長 浅島 誠

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内
電話：03-3467-3536 FAX：03-3465-3334
メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp
web サイト <https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
<https://www.sobun-printing.co.jp>



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

東大駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒースは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料になります。

【営業時間】 11:00～14:30、17:00～21:00

Tel：03-5790-5931 / Fax：03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内